

## 第44回高知女子大学看護学会 ワークショップ

### ワークショップ1：

#### 社会的ハイリスク妊婦に焦点をあてた妊娠期からの包括的支援

##### 【コーディネーター】

嶋 岡 暢 希

(高知県立大学、38期生)

##### 【企画の意図】

平成29年に母子保健法が改正され子育て世代包括支援センターを市区町村に設置することが努力義務となり、高知県でも、子育て世代包括支援センターの拡充や、対象のリスクに応じた連携と対応を目指した取り組みがされている。このワークショップでは、子育て世代包括支援センターの目的や機能を理解するとともに、近年増加している社会的ハイリスク妊婦に焦点をあて、多職種・関係機関と連携した妊娠期からの切れ目のない支援について検討することとした。

##### 【話題提供者の紹介および話題提供の内容の概要】

芝 岡 美 枝 氏

(高知県健康政策部健康対策課、39期生)

現在、保健師として高知県の母子保健行政を担当されており、平成29年度から高知県内の子育て世代包括支援センターの立ち上げ等にご尽力されている。芝岡氏からは、子育て世代包括支援センターに関する国の動向を始め、設置の目的、役割などを説明していただいた。

幸 崎 若 菜 氏

(高知県立大学看護学部)

幸崎氏は、東京都江戸川区にあるまつしま病院で社会的ハイリスク妊婦を対象とした支援外来での経験を重ねている。妊娠中から関係職種・機関と連携をとり、支援を展開した事例を紹介いただいた。

##### 【ディスカッション内容】

母子保健に携わる保健師、周産期医療施設の看護者、看護管理者などの参加があった。周産期医療施設では虐待につながりかねない事例に日々遭遇している状況について発言があり、これからは子育て包括支援センターが医療施設と地域とをつなぐ窓口になることの共有がされた。

最近の傾向として、高齢妊婦がこれまでの自立した生活から、子育てでの困難にぶつかり、虐待のリスクが高まっていること、そのようなケースは特に周囲に頼れず孤立することが多いことが報告された。また母子保健コーディネーターは、担当地域の出生数に対する人数がまだまだ不足しているという現状も報告され、リスクを抱えている対象に気づける力を専門職者として培う必要があることが共有された。看護協会では保健師、看護師、助産師の連携事業を展開しており、事例分析から、それぞれの職種が単独で課題を解決するのではなく、職種間でつないでいくことの重要性がみえてきたという報告もされた。

これらのディスカッションから、社会的ハイリスク妊婦にかかわる専門職者が、それぞれの役割と専門性を活かして対象者のゴールを共通認識し、連携していくことが確認された。

### ワークショップ2：

#### 慢性疾患をもつ人のリハビリテーションにおける看護ケアとキュア

##### 【コーディネーター】

森 本 悦 子

(高知県立大学看護学部、38期生)

##### 【企画の意図】

慢性的な疾患を抱えた人々は、急性期治療を経て、主体的に生活を構築しながら、心身の機能の維持・調整のためのリハビリテーションを生涯継続する必要性に迫られている。看護職として人々の生活の視点を基盤にした関わりについて考えた。

##### 【話題提供者の紹介および話題提供の概要】

久 保 光 恵 氏

(高知医療センター地域医療連携室 脳卒中リハビリテーション看護認定看護師)

脳卒中リハビリテーション看護の実際を中心に、主要な障害に関する看護の具体的なケア内容について発表していただいた。

瀧 めぐみ 氏

(高知県立大学看護学部 精神看護専門看護師)

「躁状態が持続し行動化を繰り返す患者への

教育的介入」をテーマに、専門看護師として依頼された事例を取り上げ、その対応について教育的な介入を中心に話していただいた。

#### 【ディスカッション内容】

ワークショップでは、精神看護学、慢性看護学、小児看護学、家族看護学などそれぞれの立場から、「慢性期にある人」「リハビリテーション」「看護ケアとキュア」について話し合った。専門が異なり現在の職種もさまざまだったが、終始全員が発言できる雰囲気であった。慢性期にある患者といってもそこに至るまでにはキュアが主体の急性期の時期を経ていること、生命の安全を保証し症状管理を行うこと、患者や家族の方々のリハビリテーションへの思いや、日常生活に戻るために獲得する必要がある行動について把握することなど、専門性に特化しない共通する看護ケアについて活発に意見交換を行った。また同じ「看護」であっても、専門が異なると知らないことが多く、新しいエビデンスに基づくケアの具体を知ることができたとの感想があった。

#### ワークショップ 3 :

**思春期の子どもたちの発達とこころのケア  
～それぞれの立場から子どもの生活を支援しよう～**

#### 【コーディネーター】

小笠原 麻 紀

(高知大学医学部附属病院、修士10期生)

#### 【企画の意図】

ワークショップでは、思春期の子どもとその家族に医療・教育等、地域社会でかかわっている職種のみならず悩みや気付き等を、率直に顔を合わせて話ができる場としたいと考えた。

#### 【話題提供者の紹介および話題提供の内容の概要】

井 上 一二三 氏

(高知県立療育福祉センター看護部長)

社会において発達障害の理解は深まりつつあるが、「対応が難しい子どもたち」という苦手意識は否めない。しかし発達障害の子どもと家族においても何よりも信頼関係が基本であり、看護師は子どもと家族に寄り添う立ち位置で、成長を見守る役割が大切であると考えていることが語られた。

岩 井 由 里 氏

(県立幡多農業高校養護教諭)

保健室に来室する生徒の事例(発達障害、心因性反応等)を通してお話していただいた。養護教諭は看護ケアの視点でのアセスメントとアプローチを組み立てて、教育の現場・チームと協働していく役割がある。症状を「病気」と見極めることは重要だが、思春期特有の反応であることも査定して、子どもの立ち上がる力、成長を信じて寄り添うことを大切にしていると語られた。

#### 【ディスカッション内容】

教員(養護、看護)、看護師(精神、小児)、大学院生等、医療や教育の現場で実践者として活動されている方々が参加された。医療現場では病気・症状から状況を看護ケアの視点でアセスメントして日常生活をサポートしていくが、教育現場では医療的な診断は養護教諭しかできないため根拠を明確にして教育関係者に説明ができることが重要であることが話し合われた。看護師は医療・教育・社会の現場において、関係者をコーディネートする役割を担っていることが話された。そして参加者に共通する考え方として、「できないこと」ではなく「できていること」「子どもの持つ力」に着目して成長のプロセスを長いスパンで見ること、寄り添うことが大切であると再認識できた。

#### ワークショップ 4 :

**急性期医療におけるエンドオブライフケア  
～患者の権利を守るために～**

#### 【コーディネーター】

大 川 宣 容

(高知県立大学看護学部、35期生)

#### 【企画の意図】

生物学的な死は避けられなくても、最期の時までその人の尊厳をもって生きることを支えるためには、患者の意思の尊重が重要である。しかし、患者の権利擁護については悩む場面も多く、看護師は葛藤を抱えながら患者と向き合っている。そこで、2名の話題提供者とともに急性期医療の現場からできることを検討した。

### 【話題提供者の紹介および話題提供の概要】

岡 林 志 穂 氏

(高知医療センター 急性重症患者看護専門  
看護師、修士16期生)

岡林さんから、救急医療におけるエンド・オブ・ライフ・ケアの現状について、患者の権利が脅かされる事例、救命救急センターで終末期を迎えた患者・家族の外出希望を実現させた実践が紹介された。

原 田 千 枝 氏

(高知大学医学部附属病院、39期生、修士9  
期生)

原田さんからは、患者の権利を守るための組織的な取り組みが紹介された。患者も家族も医療者も多様な価値を持つことを理解し、提供する治療や看護が患者にとって不利益になっていないかをチームで検討することが重要であることが共有された。

### 【ディスカッション内容】

家族として代理意思決定にかかわった方、集中治療領域で実践をしておられる方、大学院生などが参加しており、患者の権利が脅かされる場面が多いことを共有した。救急領域では、時間が切迫していること、患者の意思が分からないことなど困難な要因がある中で、患者の人生に焦点を当てたケアを考えることは難しい。しかし、救命のプロセスで、丁寧に患者・家族にかかわることにより、家族から患者の推定意思が明らかになることも多く、家族と医療者が話し合いを重ねて合意形成をしていくことが重要である。医学的適応と患者の意思が対立する場面など、看護師自身がジレンマを感じることも多いが、「もやもや」を個人の悩みにせず、チーム全体で情報を共有し、相互に相手を尊重しながら多職種で話し合うことで、患者の権利を守るケアの方向性が見えてくることを確認した。

### ワークショップ5：

専門職として主体的に学び続ける意味

### 【コーディネーター】

田 鍋 雅 子

(高知医療センター、38期生、修士13期生)

### 【企画の意図】

専門職である看護職は、主体的に自己研鑽を

続けることが求められている。今回、働きながら修士課程で学んだ2名を迎え、進学した経緯と修士課程で得られた学びや課題、また、それらを修了後どのように臨床につなげているか等を振り返ることで、専門職として主体的に学ぶことの意味や意義について考えた。

### 【話題提供者の紹介および話題提供の概要】

片 岡 薫 氏

(高知医療センター、修士17期生)

野 口 裕 子 氏

(高知県健康政策部健康長寿政策課、修士18  
期生)

看護師または保健師としての実践を経て修士課程へ進学した経緯やきっかけ、修士課程で得た学び、今後の課題について紹介していただいた。仕事をしながら進学した修士課程では、実践と理論が身近なものであったことを再確認でき、専門性と年代の異なる同期生とのディスカッションから、視野の拡大、人とのつながりを確認する機会となっていた。また、研究に取り組む中で「分析する力」や「まとめる力」が付き、修了後の実践にも役立っていた。専門職として自己研鑽の気持ちを忘れず学び続けること、また、その『楽しさ』について語られた。

### 【ディスカッション内容】

看護師、保健師、教員、そして現在修士課程に在学中の院生らの参加があった。働きながら進学した経験のある人が多く、仕事をしながら学ぶことで仕事に影響を与えてはいけないという共通の考え方があった。仕事をしながら学ぶことは、ゆらぎや迷い、仕事・学業のどちらに対しても折り合いをつけることの難しさも経験する。それでも学び続けることで、『楽しさ』や『(専門職として) 責任を持って仕事をする』につながるということであった。専門性や年代の異なる同期とのディスカッションは、モチベーションを支え、臨床にどのように繋げていくかという視野や自分自身のものさしを広げることにつながる。学び続けることは自分自身と向き合う厳しさもあるが、言語化できるようになったり、学んだことがその後の仕事につながり役立つ。どの領域であっても、学びを臨床あるいは学生たち後進にいかにつないでいくか、目に見えるものとしてどのように表現するかが今後の課題であることについても話し合われた。



進学を考えている方の参加者がなかったことは残念であったが、専門職としての学びの重要性を再確認できたディスカッションであった。

#### ワークショップ6：

##### ケアとキュアの融合が創るシームレスな高齢者の退院支援

###### 【コーディネーター】

久保田 聡 美

(高知県立大学健康長寿センター、32期生)

###### 【企画の意図】

高齢者が治療の場から生活の場へ移行していく退院支援は、まさに「ケアとキュアの融合」が求められる。診療報酬改定等で臨床現場も大きく変化していく中、高齢者の退院支援に関するケアとキュアの融合の現状と課題を検討する。

###### 【話題提供者の紹介および話題提供の概要】

池 田 久 乃 氏

(高知医療センター がん看護専門看護師、34期生)

池田氏は「術後せん妄が認められた独居高齢者の退院支援」をテーマに急性期病院の具体的な事例をもとに急性期の治療を受けて、病態としての退院許可がおりても家族などのサポートが得られない場合、退院しても大丈夫という判断をどのようにするか悩む現状が報告された。

渡 邊 美 保 氏

(高知県立大学看護学部、博士13期生)

渡邊氏は「高齢者のリロケーションダメージを軽減する看護介入」をテーマに入院時から次の生活の場を見据えて退院支援するために、高齢者のもてる力を活かすケア、入院環境に伴う二次的障害を防ぐための外来からのケアの視点について示された。

###### 【ディスカッション内容】

参加者からは、急性期病院において退院支援以前の具体的な状況について語られた。多くのアセスメントツールがケアに活かされず手段が目的化されている実情や専門性の高いナース(CNS、CN等)が困った時にはすぐに相談に乗ってくれるというシステムが逆にジェネラリストの力量を低下させているのではないか、キュアの継続性を重視し高齢者の退院後を気に掛ける

医師と比べ、看護師はどこまでケアの継続性を意識しているのかという疑問が聞かれた。一方で外来と入院のケアを継続のための記録(サマリー等)の工夫や困難事例を通して地域で暮らす高齢者の生活状況を知り、入院中にADLを落としてはいけないと覚悟してケアを工夫している等があげられた。これらのことから、ケアとキュアを融合し、シームレスな退院支援を実現していくためには、一人ひとりの看護師が目の前の患者さんの退院後の療養の場での生活に関心を持つことが大事で、そのための「立ち止まれる場創り」には、CNSやCNと看護管理者が協働していくことも重要であることが再確認された。

#### ワークショップ7：

##### 看護の実践を語ることで気づく自己の成長

###### 【コーディネーター】

佐 東 美 緒

(高知県立大学看護学部)

###### 【企画の意図】

5名の話題提供者は、各々の職場で看護職者としてその専門性を発揮しながら活躍している。発表者の看護実践の振り返りを通して、卒後3年目までの参加者自身が、就職後の自己の成長に気づく機会にしたいと考えた。

###### 【話題提供者の紹介及び話題提供の内容の概要】

尾 崎 千 芳 氏

(高知大学医学部附属病院、62期生)

公 文 咲 氏

(旭小学校、62期生)

小 松 由 季 氏

(愛媛県立新居浜病院、63期生)

曾我部 麗 市 氏

(高知医療センター、63期生)

廣 瀬 絵理奈 氏

(高知県総務部職員厚生課 61期生)

卒後2～4年目の話題提供者は、看護師、養護教諭、助産師、保健師として看護を実践している。勤務先での患者さんや子どもたち、家族、地域住民や職員への看護実践、多職種との連携などを振り返り、成長したこと、学び、気づきや自信をつけたこと、悩み、今後の展望などについて発表していただいた。

【ディスカッション内容】

話題提供者には、ディスカッションの中で、常にアンテナを張ること、経験を増やし次に繋げることなど、参加者へ具体的に自己の成長を促進する方法を教えていただいた。今では患者さんの思いを発言する、その人らしく治療を受けられるようにする、感情を整え多角的にメンバー全体を見渡す、向上心を持って知識や技術を磨き、看護の対象者へ還元することもできるようになったと語っていた。

また、地域や学校での看護実践では、「キャッチする力」を養うことの重要性やPTCAサイクルを活用して、児童の健康の保持・増進に役立っていることも教えていただいた。

このように、看護職者として自己の課題を明確にし、最善の看護が実践できるように努力する姿勢を話題提供者に語っていただくことによって、参加者はこれからの自己の成長を確信したのではないだろうか。